



社会・人間科学特別講義SB
地球市民のためのエコロジーとスピリチュアリティ
第6回:アメリカ先住民の知恵

2022.7.19

リベラルアーツ研究教育院教授

中野民夫

tamio.nakano@me.com

全体の流れ

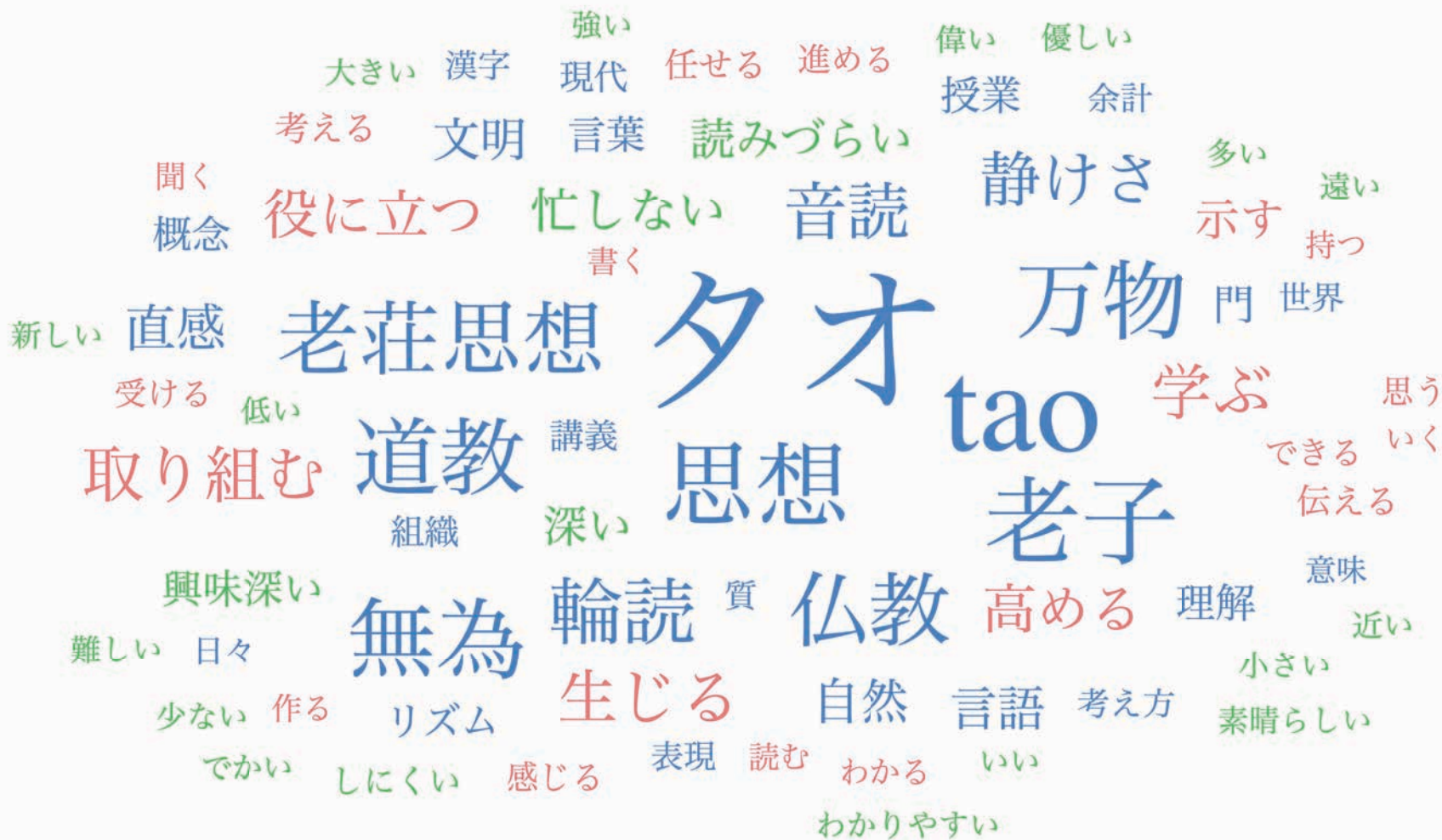
(T2SCHOLAのカリキュラムの流れを少し修正しました)

- 1) 6.14 : オリエン、SDGsとサステナビリティの基本
- 2) 6.21 : ディープエコロジー、ジョアンナ・メイシー、
 - 深いつながりを取り戻す→Coming Back to Life, Active Hope
- 3) 6.28 : マインドフルネス、ティク・ナット・ハン
 - 今、ここ、ありのままに気づく。→万物の相互依存性 “inter-being”
- 4) 7.5:般若心経、修験道
 - 歌で学ぶ「色即是空・空即是色」とマントラ
- 5) 7.12 : 老子（タオ）の世界、加島祥造
 - 英訳からの現代語意識。社会意識と宇宙意識。
- 6) 7.19 : アメリカ先住民の知恵、「知恵の三つ編み」
 - 口承の物語「狼の代弁は誰がするのか？」を輪読
- 7) 7.26:聖フランチェスコの平和の祈り、総まとめ。
 - 「神よ、私をあなたの平和の道具としてお使いください」
 - 最終回対面でやりたくW9-716予定。来られない人も。ハイブリッド？

先週のフィードバックシートより

(User Local のAIによるテキストマイニング)

ワードクラウドスコアが高い単語を複数選び出し、その値に応じた大きさを図示しています。単語の色は品詞の種類で異なっており、青色が名詞、赤色が動詞、緑色が形容詞、灰色が感動詞を表しています。



10行要約より

(User Local のAIによるテキストマイニング、文書10行要約から抜粋)

- 実際に音読することで自分の体にすっと入ってくるのを体感でき、良い経験になった。
- 朗読で実際に声に出すことで自分の中に言葉が染み込んでいく感覚があった。
- 「TAO」は常に低姿勢を持ち、自分を偉い存在だと思っているわけではない。
- 絶対視するのではなく、自分で考えるというのはタオ（道）らしい。
- 日々の生活の中で、幸せや自然、平和といった規模の大きい概念を考える機会は少ない。
- 「高い能力」と「低い姿勢」の組み合わせが、TAOの良さなのだと考えている。
- 自分の知っている言葉で言うと、「気」や「霊」なのではないかと思った。
- タオの思想、リーダーは何もしない方が一番いいと考えられている。

フィードバックシートより抜粋（中野）
お互いに読めると学び合えるでしょ。読めたかな。

<https://docs.google.com/spreadsheets/d/14nHkmHZ67e2Q9sAVSJVeWafip-HOcMa9DY5oFQn5Osw/edit#gid=1157029378>

- 謙虚さや静けさを持つ人が徐々に増えて規模が大きくなり（道が水のように広がる）、それによって世の中は平和になると解釈した。
- 自由とは何か、静けさとは何か日々の自身の日常に当てはめて考える機会となった。
- タオは「大いなるもの」「自然の摂理」「ワンネス」がキーワード
- Taoについて学ぶ中で、自然のリズムに身を任せながら、自分の内側のエネルギーの動きに注目していきたいと思った。
- 人生においても国においても最も重要な課題は、シンプルで健康的な環境を作ること。
- 現代の中国人は仏教・タオに了解が不足という残念な気持ちがあった。
- これまでの授業を通して、自分の内面と向き合うことの大切さを感じています。自分の癒しになっていることも気付きました。しかし、自分に余裕がないとできない。その余裕を無理矢理でも作り出したほうがいいんでしょうか。
- もう少し無為を意識して肩の力を抜いてみたらいいのではないかと気が付けた。時折思い出してぼんやりでもいいから自然のリズムに任せてみたい。



We are all

Children of the Earth.

みんな地球の子どもたち

Tamio

今日の流れ

1420-1600

- オリエン、復習 14:20-14:30
- チェックイン 14:30-14:40
- アメリカ先住民の知恵 14:40-15:20
 - 「狼の代弁は」 輪読 1 + BOR対話
- 北米の旅とサークルソング 15:20-15:35
- 輪読 2 「シアトル首長」 15:35-15:50
- BOR、次回、FBシート 15:50-16:00

BORでチェックイン

- 少人数で、交流と復習
 - 1. 名前（やってること・研究テーマ）
 - 2. 近況・今の気分
 - 3. 前回の「老子のTAO」で学んだこと・考えたこと



アメリカ先住民の知恵 導入

1. 「インディアン」という呼称、“Circle”
2. 輪読「狼の代弁は誰がするのか？」
3. ピースメイキングサークルの源流をめぐる旅
4. 輪読「シアトル首長のメッセージ」

アメリカ先住民のこと、どれくらい知ってますか？

- 「アメリカ・インディアン」という呼び方
 - 1492年、コロンブスがカリブ諸島に到達した時、インド周辺と誤認し、先住民をインディオス（インド人）と呼んだことから。
- ヨーロッパの風土病の免疫を持たず、人口激減＋虐殺・闘争
 - 「1890年12月ウンデッド・ニーの虐殺により、白人によるインディアン戦争は終結。最終的には推定1000万人いたインディアンは白人の直接・間接虐殺により実に95%が死に絶えた」（ウィキペディア）
- →“Native American”と呼び直す動き（白人主導?）
 - 近代の絶滅政策で居留地へ。英語強制。だが今でも、5-600もの部族があり、人口247万人とも。主な部族はナバホ、チェロキー、スー、アパッチ、イロコイ、プエブロ等。
- →世界中で「先住民」(**indigenous people**)の復権の動きvs今だ差別
 - カナダでは“First Nation”、文化の再興も。オーストラリアのアボリジニ、日本のアイヌ、ハワイ、アラスカのイヌイト等

私の出会い

- 子どもの頃（1960年代）：テレビ映画西部劇での悪役
 - 世界史では習わず。西洋からのアメリカの開拓史のみ。
 - 大学の頃『気流のなる音』（真木悠介）「アメリカ・インディアン」の詩」（金関寿夫）
- 1980年代映画「ホピの予言」（宮田雪監督）から一部で静かなブーム
 - →Run for Land and Life 祈り=走る 全国で支援の輪、88にも。
- カリフォルニア留学、組織変革の先生Howardが「サークルとトーキングスティック」（輪になって座り、棒を持っている人だけが話す）
 - ネイティブの人々の暗闇での儀式、スウェット・ロッジなど体験。
 - Earth Based Wisdom大地に根差した知恵。今も差別続き、良いとこどりは要注意。
- 星川淳氏の環太平洋先住民をめぐる一連の著作・翻訳
 - 小説『ベーリンジア』。『1万年の旅路』『知恵の三つ編み』（ポーラ・アンダーウッド）、ハワイの伝統航海師ナイノア、アメリカ建国への影響『魂の民主主義』
- 真砂秀朗：ネイティブ・フルートのCD。アーティストへの影響大。
 - カルロス・ナーカイから始まる笛。ワークショップ BGMとしても愛聴。

“Circle”（サークル）について



- ポーラ・アンダーウッド：
 - アメリカ先住民“Walking People”の歴史伝承者
 - 『一万年の旅路』 『知恵の三つ編み』 等著者
- サークルの意味
 - 「この輪の真ん中には、中つ火ができます。みんなが持ち寄った様々な経験や知恵などが薪となります。お互いに敬意を持って聴こうという気持ちが発火材になり、他の人の話をよく聴くことで理解の火花が散るのです」
 - 『ワークショップ』（中野民夫、岩波新書、2001）より

輪になって座る

- 人々は古来から、輪になって座り、語り合い、生き延びてきた。
- 真ん中には「火」があった。暖をとる、料理を囲み、歌や踊り、そして物語が伝えられた。
- 3.11直後の南三陸町でも、ドラム缶の焚き火の周りに男達が！
- 簡単な正解のない問いに向けて、「集いあい、問い合う」ためにも、輪になって座ろう。
- 東工大の立志プロジェクトで全員が「えんたくん」で対話を。
- 歌のチャンティング・サークル





屋久島でポーラ著、星川訳『一万年旅路』読書会



輪になって座れないのは残念ですが、
物語を輪読していきましょう
3行以上で段落代わりで交代

「狼の代弁はだれがする」

『知恵の三つ編み』

(ポーラ・アンダーウッド著、星川淳訳) より

『知恵の三つ編み』

ポーラ・アンダーワット

星川淳訳



第1話

狼の代弁はだれがする

①

中つ火の明かりが丸くとどく境目あたりに、狼がたたずんでいた。火の暖かさを映しながらも、その目の光は冷たかった。

八つの冬を越した少年が狼を見守っていた。狼と同じくらいじつと動かず、同じくらい一心に——。最後に、少年は祖父のほうへ向き直った。その冬最初の冷え込み、祖父は老いた体を暖めていた。

「なんで狼はあそこへ立って、ただ火を見てるだけなの？」

「おまえがそうするのはなぜかね？」祖父は答えた。

その言葉で少年は思い出した。火がともされてから狼が来るまで、ずっと炎に見とれていた自分を。こんどは狼に見とれていたのだった。狼が自分とはまったくちがって

るのに、同じように火を見つめ、しかも火を恐れていないように見えたからだ。少年には、そのことが理解できなかった。

狼の立っているそのむこうには丘があった。中つ火の明かりが、もう一頭の狼の顔をおぼろげに照らし出して、少年を驚かせた。その一頭は月を見ていたのだ。

月を見る狼は歌を歌いはじめた。だんだんと声を合わせる狼がふえ、最後には火を見る狼まで、うれしそうに喉を鳴らして歌の出だしを歌った。彼らは月のために歌い、お互いのために歌い、聞き耳を立てるあらゆるものたちのために歌っていた。それは、大地がすばらしい場所であること、私たちをどれほどの美が取り巻いているかということ、そしてそのすべてが、月と火を見れば一番よくわかるときがあることについての歌だった。

それに耳を傾けていた少年は、狼の歌を聞く以外、人生でやりたいことなんかないと思っただ。

長くてとくべつ美しい歌が終わると、月を見る狼が静かになり、その兄弟たちも少しずつその沈黙に加わって、最後には一番遠くで「おれはここにいるぞ！ 忘れてくれる

なよ！」と大声を張り上げていた一頭まで、夜に場所をゆずって見守り、そして待った。火を見る狼も野営地から歩み去って、丘の近くの兄弟たちと合流した。

「まだわかんないな」少年が続けた。

「なんで狼が火を見るの？ なんでぼくらの暮らしているこんな近くでくつろぐの？

なんで女の狼は、狼じゃないほくらこのんなにすぐそばの丘で歌を歌いだすの？」

「わしらはもう長いあいだ知り合いなさ」老人が答えた。

「わしらは一緒に暮らすことを学んだんだよ」

少年はそれでもなお怪訝けげんそうな顔をしていた。心のなかでは、理解のかけらぐらしかつかめていなかった。

しばらく無言だった祖父が、やがてゆったりとしたリズムの吟唱をはじめた。少年は、もうすぐ自分にもわかるようになるかと納得した。いままでより狼のことをよく理解し、人間と狼とがどうつきあってきたかを学ぶんだ、と――。

遠い昔

遠い昔

遠い昔……

祖父は唱える。そのリズムは狼の歌とからみ合って、森に溶け込んでいった。

遠い昔

わが一族の数がふえ

それまで暮らしてきた場所が手狭てぢまになった

多くの若者が送り出され

一族が心おきなく暮らせる

新しい場所を探した

探索に出た若者たちは

もどつてくると

それぞれに見つけた候補地をあげ

自分の場所が一番だと主張した

そんなわけで

たくさん候補地のうちどれが最適か

一族は決定を迫られた

さて、そのころ

一族のなかに

狼と兄弟づきあいをする者がいた

その親密さは

彼が狼の歌を歌いかけると

狼たちがこたえるほどだった

その親密さは

若い狼たちが

ときに彼のあとをついて森を歩くさまは

まるで彼から学ぼうとしているかのようだった

そこで、そのころ

一族は彼にとくべつな名前を授けた

その名は「狼の兄弟」といい

狼について知りたい者や

狼の歌に興味をもつ者

それを歌いたいと思う者は

彼のかたわらにすわって

自分の関心を告げ

答えを待つのだった

③

「ぼくらが狼に歌いかけるのは、そのときからなの？」少年は興味津々しんしんでたずねた。

「その人がぼくらにやり方を教えてくれたの？」少年はまろび出す言葉を止めようと、両手であわてて口を押さえた。祖父の歌の邪魔をしているのに気づいたのだ。

ほほ笑んだ老人の目尻のしわが、別の時代の、ほかの少年たちについて語った。

「そうとも、その人だよ！」祖父が答える。「それ以来、わが一族の多くの者たちが、喜んで狼に歌いかけ、狼を理解することを学んできたんだ」

その答えに勢いづいて、少年がたずねた。「そのときから、狩人たちが狼に歌いかけるのを学びに行くんだね？」

「狩人たちだけでなく、たくさんの者が行く。男たちばかりでなく、たくさんの者が行く」祖父は静かに語った。

「今夜歌いはじめたのも、女狼ではなかったかね？ だとしたら、わしらのうち男だけがこたえるのがふさわしいだろうか？」

少年はうなだれた。彼は狩人になりたくてうずうずしていた。狼の歌を学びたくてしかたなかった。けれど、祖父の言葉に知恵が宿っていることもわかった。狼から学ぶの

②

は狩人だけではないのだ。

「だが、おまえのおかげで横道にそれてしまったわい」老人はいう。

「最初の歌を終わらせなくてはな」

少年はすわり直し、学びを待った。

(4)

さきほど話したとおり

一族は森のなかに新しい場所を求めた

彼らは一心に

若者たちがそれぞれ、丘や木々について

開墾地や小川について

鹿やリスや木イチゴについて語る言葉を聞いた

どの場所が雨季に乾き

冬暖かく

わが三姉妹たるトウモロコシと豆とカボチャが

どこを好みそうかを聞きとろうとした

彼らは耳をすまし

そして選んだ

選ぶ前に

彼らはすべての若者の話を聞いた

選ぶ前に

若者たちのうち

水の流れにくわしい男

ロングハウスの建築設計にくわしい女

冬の嵐にくわしい男

三姉妹にくわしい女など

あらゆる者の話に耳を傾け

ようやく合意に達すると

一族の最長老が

最後に立ち上がっていった

「それでよろしい

そう決まった」

「ちよつと待って」

だれかが口をはさんだ

「へ狼の兄弟へはどこ？

狼の代弁はだれがするの？」

だが

一族の決定は下された

彼らの心は固まり

第一陣が出発した

最初のロングハウスの敷地を選び

三姉妹の畑を開き

水の流れに手を加えて

住居に水がこないように

なかの者たちが安心して暮らせるように――

そこへへ狼の兄弟が帰ってきた

彼は新しい場所の話を聞いたとたん

別な場所を選ばなければならないといった

「よりによって狼の大群の

中つ地を選んだのだよ」

しかし、人びとは彼に答えた

大勢の者がすでに出発し

計画変更は難しい

われわれがときどき狼にしてやるように

狼だつてわれわれに場所を譲ってくれてもよさそうなものだ、と
だが、へ狼の兄弟へは忠告した

「人間と狼が共存するには

あの場所は小さすぎるだろう

あとで移動するのは

いま計画を変更するよりもっと大仕事だろう」

⑤

しかし

一族は耳をかさず

考え直そうとはしなかった

新しい場所の準備がととのうと

一族全員がいつせいに立ち上がり

値打ちのある物をたずさえて

最後に新しいふるさとを眺めた

考えてごらん

この新しい場所は

夏涼しくて冬暖かく

早瀬があつて

森に囲まれ

鹿とリスにあふれ

三姉妹の居場所まであつたのだ

そして、ここが気に入つた一族は

目に入らなかつた

木陰から見守る狼が！

④

だが、時がたつにつれ

目につきはじめた

だれかが鹿やリスを獲ってきて

木の枝にかけ

肉の容れ物を取りに行ってもどると

木にはなにもかかっておらず

そのむこうに狼がいるのだ

最初

それは納得のいく交換のように思えた

住む場所のかわりに、いくらか食べ物を差し出すのだから――

しかし

やがてそれだけではないことが明らかになった

ときとしてわれらが建てた住居のあいだを

狼が歩きまわるようになり

女たちはだんだんと

赤ん坊の身を案じはじめた

思案のすえ

彼らは狼と一つの取り決めをすることにした

女たちが村のはずれに集まり

狼とその兄弟たちのために食べ物を置くのだ

しかし、やがて

それでは食べ物を差し出す量が多すぎるのと

また狼もますます増長し

村のなかまで食べ物を探しにくるようになって

前より悪いことがわかった

われらには狼を手なずけるつもりはなかった

そこで

女たちの泣き声を聞いて

男たちが一つの方法を考え出した

彼らの何人かが

つねに見張って狼を追い払うのだ

するとすぐ、狼はもとの野性にもどった

だが

やがて人びとは

これに労力を取られすぎて

⑤

冬の備えが間に合わないことを発見した

そして、長い寒さが日に日に

前より長く、寒く感じられるようになった

そこで

男たちが

別な道を選ぶために相談した

彼らは理解した

狼に食べ物をやることも

狼を追い払うことも

一族の望む生き方ではない、と

彼らは理解した

狼と人間が

これほど狭い場所で

気持ちよく共存することはできないのだ、と――

彼らは理解した

狼一族を狩って

絶滅に追い込むこともできるのを

しかし、彼らはまた理解した

それには長い年月にわたって、多くの労力が必要なことを

彼らはこうも理解した

そんなことをしたら、一族そのものが変わり果て

彼らは狼殺しになってしまふ、と――

自分の生命を保つためだけに生命を取る一族は

少しだけ場所を動くかわりに

生命を取る民になり下がるだろう

そんな民になることは

彼らの望みではなかった

最後に

一族の最長老の一人が

みな気持ち代弁していった

「どうやら

〈狼の兄弟〉の先見のほうか

わしらより鋭かったようだ

彼の忠告どおり、あのとき計画変更をしていたら
いまここで暮らすほど労力はいらなかっただろう」

祖父は少し間をとり、膝で吟唱のリズムを保ちながら続けた。

さて、これは

ある一族がひと冬のあと

住みかを移したという素朴な物語に聞こえるかもしれない

ただし

一族はここから

大きな教訓を学んだ

この教訓を

われらはけっして忘れなかった

というのも

話し合いの最後に

最長老の一人がもう一度立ち上がっていった

「ここから学ぼうではないか

二度とふたたび

一族が村を築いては、すぐに移動しなくてすむように――

二度とふたたび、エネルギーを得ようとして

得るエネルギーより多くのものを失うことなどすまいぞ

われらは学んだ

被害のたびに家を建て直すより

冬の嵐が弱い場所を選ぶことを

⑥

われらは学んだ

病を抱えるより

水が淀ま^どない場所を選ぶことを

「こんどは、狼のことを考えに入れることを学ぼうではないか！」

こうして、一族は

新しい場所なり、新しいやり方なりについて

決定を下すにあたり

互いにたずね合う方法を編み出した

われらは、新しい可能性の一つひとつについて

そこを流れるエネルギーを秤^{はかり}にかけ

どれだけならじゅうぶんで

どれだけなら過剰かを吟味する

最後に

だれかが立ち上がり

古い、古い問いを問う

まだ心が曇^{くも}っていてはつきりと思^{おも}い出せない

ものごとを思い起こさせるために――

「さて、わが兄弟たちに聞く

さて、わが姉妹たちに聞く

狼の代弁はだれがする？」

⑦

BORで

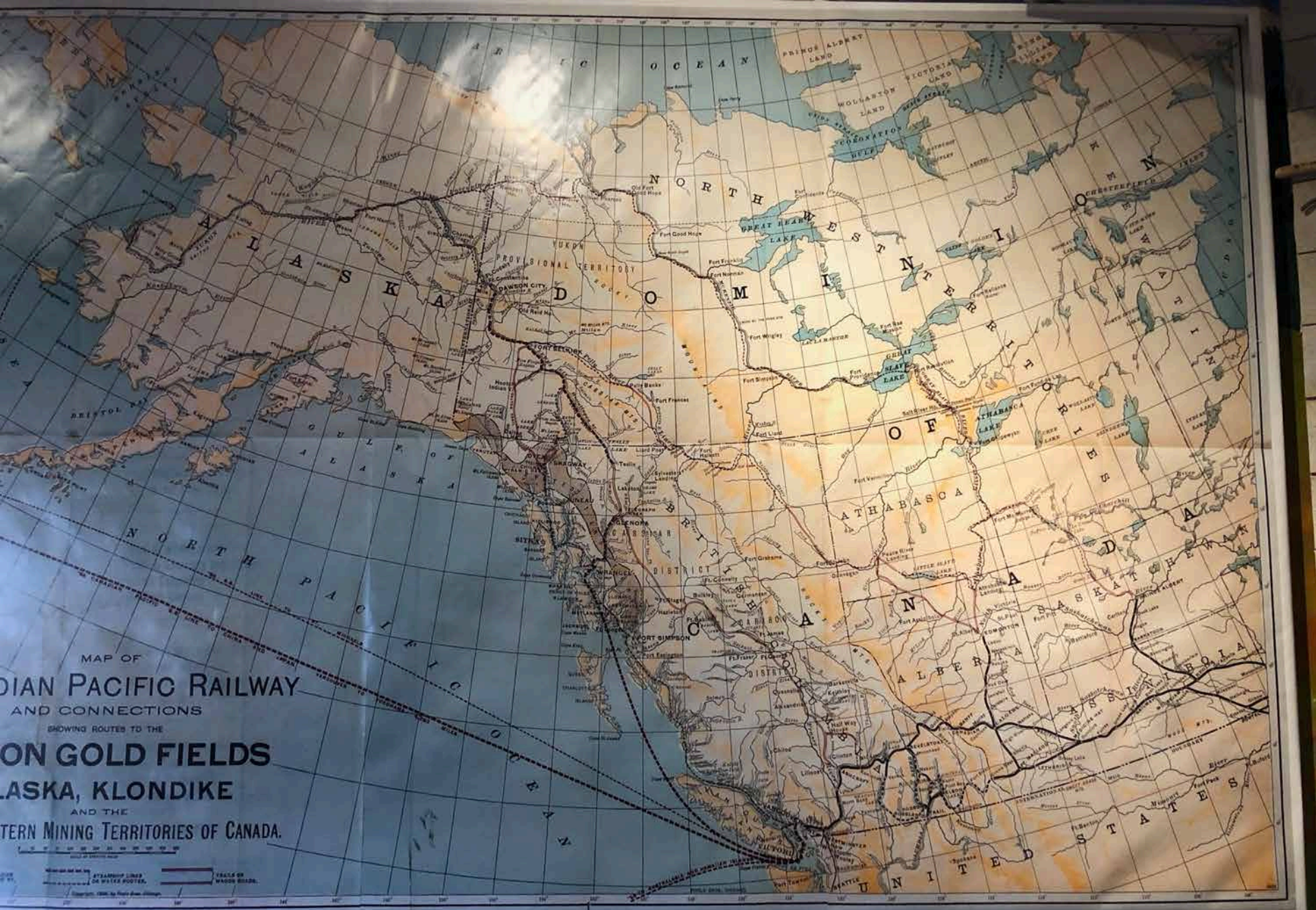
- 物語を輪読して、
- どんな体験でしたか？
- どんな気づきや発見がありましたか？

カナダ ユーコンの旅2018

Peacemaking Circleの源流を探る旅 2 抜粋

2018年9月

Keiko, wesley, 嘉村賢州(Total)他と
中野民夫



MAP OF
CANADIAN PACIFIC RAILWAY
 AND CONNECTIONS
 SHOWING ROUTES TO THE
ALASKA GOLD FIELDS
 AND THE
NORTHERN MINING TERRITORIES OF CANADA.

STEAMSHIP LINES
 OR WHEEL ROUTES.
 TRAILS OR
 WAGON ROADS.
 Copyright, 1898, by Pacific Coast Company.



WHITEHORSE

HISTORY COMES ALIVE

Yukon



Chamber of Mines

Name: Gold Nuggets
Locality: Last Chance Creek,
Klondike Goldfields
Donated by: Elsie Fisher







EXIT

EXIT



Muskrat
Muskrats are the only North American mammal that can swim underwater for long periods. They are also the only mammal that can hold their breath for 15 minutes. They are also the only mammal that can dig through mud and ice to find their way to the water. They are also the only mammal that can live in the water for most of their lives. They are also the only mammal that can live in the water for most of their lives.



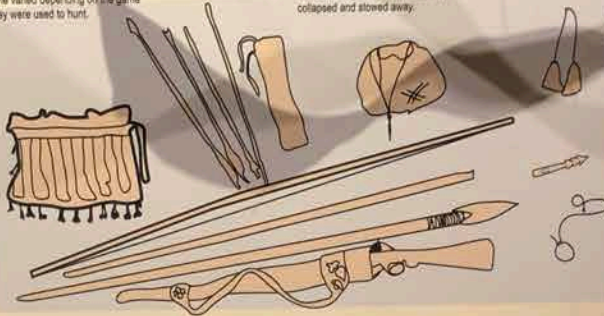
Spears, Arrows and Snares

The bow and arrow were used for hunting caribou and sometimes moose. The arrows were traditionally tipped with large, barbed antler points designed to promote bleeding so that the animal would quickly weaken and die.

Some arrow tips had incised decoration of lines and dots, or alternating triangle motifs. The shafts were often painted with red ochre.

Ochre, probably mixed with grease, was also used as a 'protective' agent on snares and snowshoes, and other objects that came into contact with snow.

Arrows with detachable heads. The style varied depending on the game they were used to hunt.



Bags such as this *Bebeche Bag* for travel because they are made of the skins that

Moody, the dog, used to be used to carry hunting provisions, small game or fish. When the bags were not in use they could be collapsed and stowed away.

Beaver Bells were used to alert hunters that a beaver had been trapped in their nets. If not retrieved immediately, the beaver could easily chew through the wire net and escape.

A *Beaver Spear* was a harpoon with a detachable head made of bone or antler with barbs along one side. Lines were run through the hole(s) at the base of the spear point so that it could be retrieved after being breached.

Woven Grass Basket

Records state that this basket passed from the hands of "Aggie" Jimmy to Mrs. T.C. Richards to "Bobby Brown," and from her to Margaret Westington (middle bottom collection).

Woven Grass Baskets

Created in May, Yukon. Middle bottom collection.

Birchbark Baskets

Middle bottom collection.

Fish Knife

Steel knife blade lashed to handle with leather strip, wooden handle base curved and scrolled design. This knife was used to remove bones from large fish.

Donated by Omer Matthews,
MacBride Museum collection

Ulu

An ulu is an Inuit woman's knife. Its blade is formed as a somewhat semi-lunar shape, which is excellent for a variety of tasks, especially scraping skins and preparing food. This cutting tool was the primary implement for skinning pelts, chopping, slicing fish and for cutting out clothes, boots and mittens.

Donated by Mrs. A. Gibson,
MacBride Museum collection

Fish Spear

Bone leister point with steel nail hook and sinew binding. This spear was owned by Captain I.O. Stringer who was known as the "Bishop Who Ate His Boot".

Donated by I.O. Stringer,
MacBride Museum collection

Knife with Curved Handle

Steel knife blade inset in ivory handle.

Donated by I.O. Stringer,
MacBride Museum collection

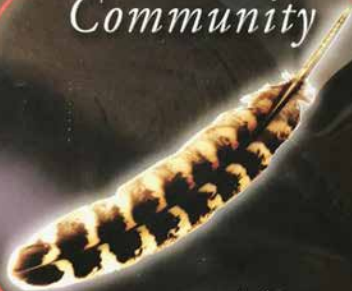
Model Kayak

A model of an Inuit kayak from the Ungava Bay region made of seal skin, circa 1880. The paddle and float are made of wood while the harpoon is made of whale bone. The harpoon line is made of sinew.

Donated by Wendy Boothroyd,
MacBride Museum collection

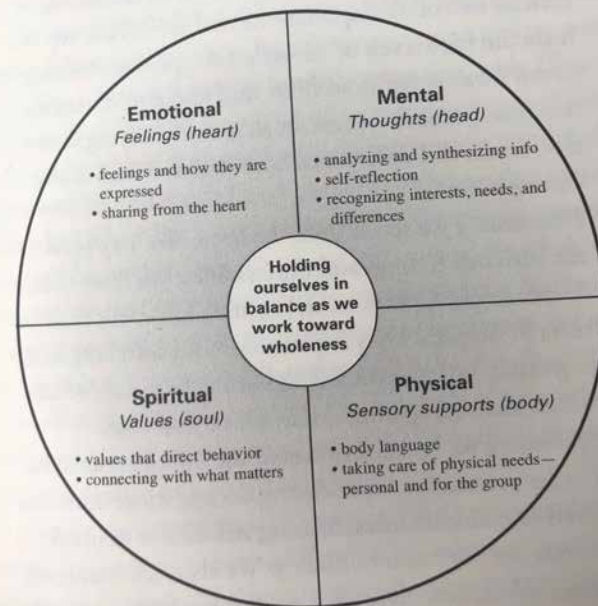
PEACEMAKING CIRCLES

From
Crime
to
Community



Kay Pranis Barry Stuart Mark Wedge

Medicine Wheel Guidance for Seeking Balance



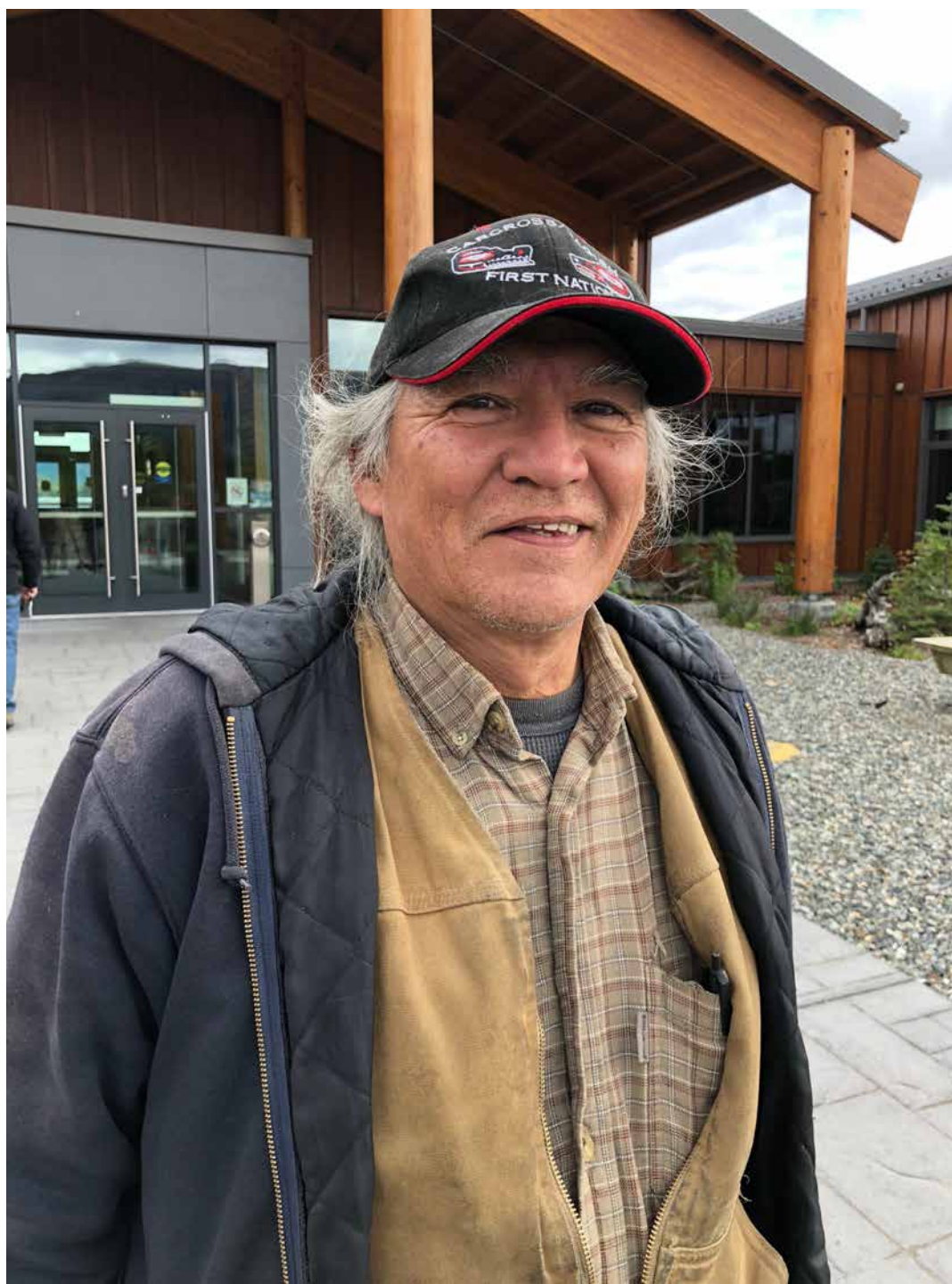


























ピースメイキングサークル の源流を探る旅から

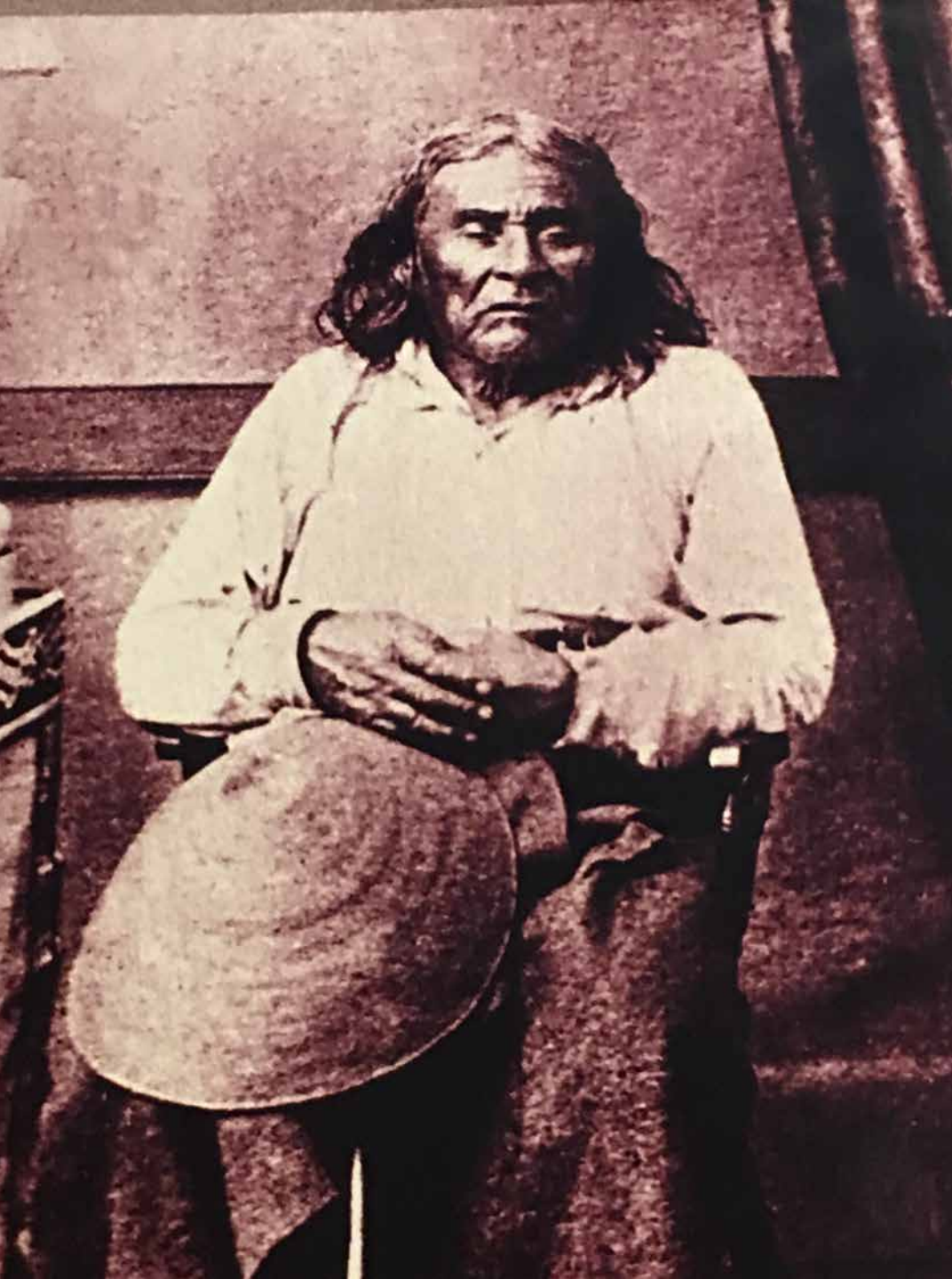
2017年9月に
米国シアトル周辺のアメリカ先住民の
エルダー（長老）を訪ねました。

シアトルは、アメリカ合衆国の北西端。カナダ国境に近い入江の街。



シアトルのパブリック・マーケット。シーフードや花など多彩。スタバの1号店も近く。





レストランに「チーフ・シアトル」の写真が！
(-1866)

シアトル首長のメッセージ
(大統領から「土地を買いたい」との申し出を受けて)

「空を、大地の温もりを、どうして売ったり買ったりできるのだろう。・・・

この地球のあらゆる部分が、我々にとっては神聖なもの。

大地が人間に属しているのではなく、人間が大地に属している。・・・

万物はつながっている。万物はひとつである。

生命の織物を織るのは人間ではない。・・・」

人々は、入り組んだ河口の入江の沿岸のロングハウスに暮らした。カヌーが活躍。



杉の皮や石を活用した様々な生活道具。人々は両手を上げて歓迎の意を表した。



木彫り師のリック・
ウィリアム氏



ワシやワタリガラス、クマなど。一族の先祖はこれらの動物に深くつながるという。





トーキングスティックや杖、
トーテムポールなどを彫
る一族の長老的存在



サークルソング：平和が生まれるとき

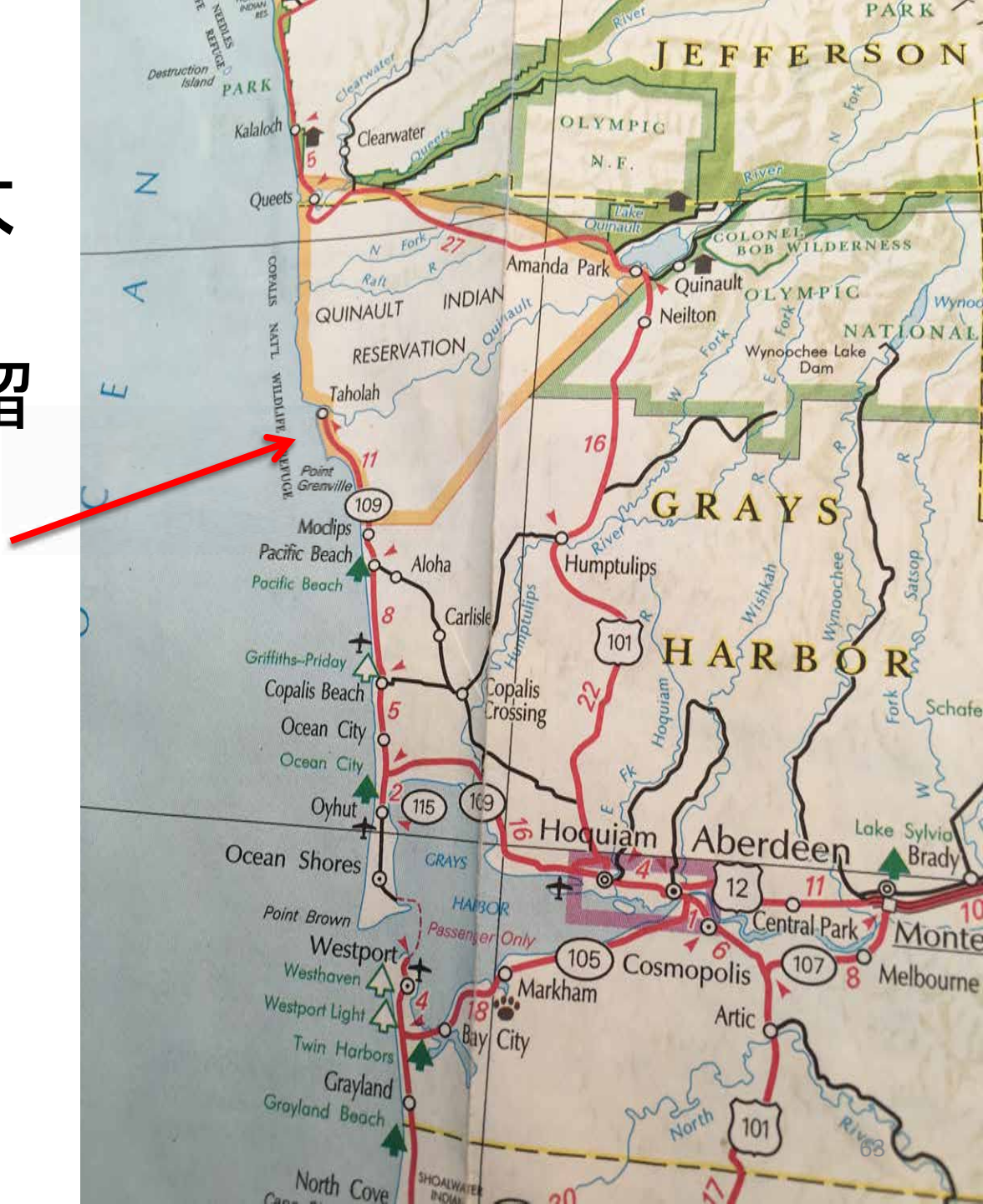
2017.10.8、歌詞原案2017.9.9@シアトルPeacemaking Circleの源流を探る旅

1)

たとえこの世界に、怖れや怒り満ちていても、
巻き込まれることなく、内なる平和大切に。
そんなお人好しでは、負け続けちゃうかもしれない。
でも負け続けることで、勝つことってあるんじゃないか。
戦い終わらせたいならあおられてはダメだよ。
たとえ今は滅んでも、その種きつとつながる
オーレー、オレー。オーレー、オレー



さらにシアトルから西へ4時間、太平洋沿岸に広がる「クアノート居留区」のタホラへ。



太平洋の対岸は日本。黒潮に乗って古来交流が。3.11の瓦礫も流れ着いたという。



クアノート族のエルダー、キキとフランシスさんご夫婦と。共に85歳



複雑なインディアン居留区の歴史や暮らしについて、苦労話も穏やかに語る。



翌朝、ご自宅の朝食に招いて下さった。何食べるのかな？と思ったらパンケーキ！



先祖から伝わるドラムや、杉の皮から作ったバスケットなど見せてくださった。



夢をつかまえるドリームキャッチャーや、鳥をモチーフにした独特のアート。



何よりカヌーを大切にする文化。数年前に各地から9,000人が集いトーテムポールも



サークルソング：平和が生まれるとき

2017.10.8、歌詞原案2017.9.9@シアトルPeacemaking Circleの源流を探る旅

2)

世界がめくるめく、変わり続けるなか、
共に変わりながらも、内なる魂 大切に。
頑固に守ろうとすると、かえってすたれてしまう。
変わり続けることで、保てることあるんじゃないか。
サステナブルって何？ 日々新たに変わりながら、
変わらぬスピリットを、静かに保ち続けること。
オーレー、オーレー。 オーレー、オーレー

Keikoさん宅、日系コミュニティのピースメイキングサークル



輪になって座り、トーキングピースを持って一人一人が心の底から語る



真ん中には、大地、水、火、空気を表すものを置く。私たちもその一部。



サークルソング：平和が生まれるとき

2017.10.8、歌詞原案2017.9.9@シアトルPeacemaking Circleの源流を探る旅

C G Am F C G Am F

オーレー、オレー。オーレー、オレー

1)

たとえこの世界に、怖れや怒り満ちていても、
巻き込まれることなく、内なる平和 大切に。
そんなお人好しでは、負け続けちゃうかもしれない。
でも負け続けることで、勝つことってあるんじゃないか。

戦い終わらせたいならあおられてはダメだよ。
たとえ今は滅んでも、その種きつとつながる

オーレー、オレー。オーレー、オレー

2)

世界がめくるめく、変わり続けるなか、
共に変わりながらも、内なる魂 大切に。
頑固に守ろうとすると、かえってすたれてしまう。
変わり続けることで、保てることあるんじゃないか。
サステナブルって何？ 日々新たに変わりながら、
変わらぬスピリットを、静かに保ち続けること。

オーレー、オレー。 オーレー、オレー

3)

慌ただしい時間のなか、さあ輪になって座ろう。

聖なるピース持って、心の底から話そう。
たまには立ち止まって、おだやかなひとときを。

時間忘れ今ここ、平和が生まれるよ。
なにげないこの時こそ、奇跡の時だよ
輪になって語ろう、苦しみも喜びも
オーレー、オレー。オーレー、オレー
オーレー、オレー。。。

輪読2 (時間の許す限り)
「シアトル首長のメッセージ」

シアトル酋長のスピーチ
(ヘンリー・スミス博士による記録)
城田朋子訳

シアトル酋長のスピーチ (ヘンリー・スミス博士による記録)

遙かな空、我らの父の上に、幾星霜にもわたって祖先たちの上に慈悲の涙を注いで来た、あの永遠と思えた空が、変わったのかもしれない。今日は晴れ渡っていても、明日は雲に覆われるだろう。私の言葉は、沈まぬ星のように留まる。このシアトルの言葉に、偉大な酋長、ワシントン(原注)信を置くが良い。白い顔の兄弟たちが季節の巡りを信ずるのと同じ確かさで。

白い酋長の息子は親愛と友好の挨拶を託されてきたという。寛大なことだ。彼らは我らの友情を必要としてはいないのだから。彼らの数は多いからである。広大な平原を覆う草のように、白人の数は多く、我が民は少ない。嵐の過ぎ去ったあとの原に、わずかに残された木のように、少ない。偉大な、そして善良であると信ずる、白い酋長が、我が民の土地を買いたいという。我らが快く住むに十分な土地は用意するという。寛大な申し出に見える。赤い人にはもはや守るべき権利はないのだから。この申し出は賢明であるかもしれない。我らはもはや、この偉大な土地を必要としてはいないのだから。

かつて我が民はこの土地を覆いつくした。風に波立つ海が、貝殻の敷き詰められた海底を覆うように。だがその時は過ぎ去り、我が部族の偉大さも忘れられようとしている。しかし、私は我らの早すぎる衰えを嘆くまい。白い顔の兄弟が衰えを早めたと咎めることもすまい。責は我らにもあるのだ。

若い者たちが、実際の、または想像上に行なわれた不正に怒りをつのらせ、顔を黒く塗りつぶすとき、彼らの心もまた黒く塗りつぶされている。その心の残忍さ、執拗さはとどまることを知らない。我ら長老は彼らを止めることができない。

しかし、赤い人と白い顔の兄弟たちの憎しみ合いが再び起こることのないように願おう。失うものは多く、得るものとして何もないのだから。若い勇士たちの手になる復讐は、たとえ彼らが命を落とすことになっても、価値ある勳とたたえられる。だが年老いて戦の時には家に残る男たち、息子を戦に見送る年老いた女たちは、より深く知っている。

偉大な父、ワシントンよ。ジョージ(現注)が国境を北に移したいま、あなたは我らの父ともなった。偉大で善良なる父がその息子を遣わした。偉大な父の息子もまた、偉大な酋長であることだろう。彼の言葉に従えば、我が民を守ってくれるだろう。彼の率いる勇敢な軍隊は、我が部族を守る砦となり、偉大なくさ船が我らの港を満たし、我らの旧い敵、北方の民シムシウムやハイダはもはや我が民の女や老人を脅かすことがなくなるだろう。その時、彼は我らの父となり、我らは彼の子となるであろう。

しかし、そんなことがありえようか。あなた方の神はあなたの民を愛し、我が民を憎む。あなた方の神はその強い腕で白い人を抱き、父が幼子を導くように導くが、赤い子どもたちを見捨てる。あなた方の神はその子どもたちを育み日ごとに強くする。すぐに彼らは地に満ち、我が民は引き潮のように見る間に衰えていくだろう。我らはみなしごのように、どこにも助けを求めることができない。どうして我らが兄弟となれるだろうか。あなた方の父がどうして我らの父となり、我らに豊かさをもたらし、偉大さを再び取り戻すことができるだろうか。

あなた方の神は偏っている。あなた方の神は白い人のために来た。我らはその神を見ることなく、声を聞いてもいない。あなた方の神は白い人に律法を与えるが、星が天空を満たすようにこの広大な大陸を満たす何百万の赤い子どもたちには語りかけない。我らは異なる種族であり、これからもそうであり続けねばならない。我らにほとんど似たところはない。我らの祖先の灰は神聖であり、その安息の地は神聖な場所だ。しかしあなた方は父祖の墓をおいて遥か彼方へ彷徨い出、悔いてもいないようだ。あなた方の宗教は、あなた方が忘れることのないように、石の板に怒れる神の鉄の指で書かれている。赤い人にはそれを決して覚えることも、理解することもできないだろう。

我らの宗教は我らの父祖の伝統であり、偉大なる霊が我らの長老に授けた夢であり、酋長らの見たビジョンであり、我が民の心にのみ書かれている。

あなた方の死者は、黄泉の国の入口に着くやいなや、あなた方や故郷の家を愛することを止めてしまう。彼らは星の彼方へ彷徨い出で、すぐに何もかも忘れ、二度と戻らない。

我が民の死者は、彼らが命を得ていたこの美しい世界を決して忘れぬ。彼らは曲がりくねった川や孤独な魂を見下ろす偉大な山々を変わず愛し、しばしばこの世に戻って彼らを慰める。

昼と夜は共に住むことはできない。これまでも赤い人は白い人の歩みの前に逃れ去って来た。山の端の朝霧が強い朝陽を逃れるように。

しかし、あなた方の申し出は正しいものに見えるから、我が民はそれを受け入れ、申し出の通り居留地に移ることだろう。そして白い人とは離れて平和に暮らすことだろう。偉大な白い酋長の声は、濃い闇を通して我が民に語りかける自然の声のようであるからだ。闇は我が民のまわりに、真夜中の海から漂ってくる濃霧のように満ちていくばかりだ。もはや、最後の日々をどこで過ごすかはそれほど重要ではない。それほど長いことではないのだから。

インディアンの夜は深い闇となろう。地平の上に明るい星はひとつも輝いてはいない。物悲しい風の声が遠くで嘆いている。赤い人の道の上には、我ら種族の恐ろしい敵が待つ。どこに向かおうとも、赤い人は破壊者の足音が確かに迫るのを聞き、不運に出遭う覚悟を決めるしかない。手傷を負った鹿が狩人の足音に耳を澄ませるように。あといくつかの月が巡り、あといくつかの冬が巡る頃には、かつてこの地の強大な主であり、この広大な地を満たした者たち、今ではわずかな群れとなり、茫漠とした孤独の中を彷徨っている者たちはついに一人もいなくなるだろう。かつてはあなた方と同様に強く希望に満ちていた人びとの墓の前で嘆く者は、一人もなくなってしまうことだろう。

しかし、嘆くことがあるか？ 我ら部族の命運に不平を言って何になろう。部族は人からなるもので、一人の人間となんら変わることはない。海の波のように、人は来たり、去っていく。涙が流され、タマナワスが[TS1] (注1)行なわれ、悲歌が歌われ、嘆き惜しむ我らの目の前から永遠に去っていく。白い人でさえも、神と共に歩み、友人のように神と語らう白い人びとでさえも、すべてに共通の命運からは逃れられない。やはり我らは兄弟かもしれぬ。未来が答えを出すだろう。

[TS1] (訳注) ピュージェット湾地域のネイティブ住民の複雑な宗教習慣を指すことば。(Furtwangler32 -35)

我らはあなた方の申し出を深く考え、結論が出たら知らせよう。しかし、申し出を受けるなら、ここで一つ最初の条件をつけておきたい。我らが邪魔をされずに祖先や友人の墓を訪ねる権利を認められることだ。この地のすべては、我ら部族にとって神聖なものだ。すべての丘陵、すべての谷、すべての平原、すべての木立ちに、我ら部族の暖かい思い出や悲しい記憶がまつわり、すべてを神聖にしているのだ。

暑い日ざしを浴びて海辺に黙しているだけに見える雄雄しい岩でさえも、我ら部族の運命にまつわる過去の記憶に打ち震えている。あなた方の足の下にある土くれでされも、我らの歩みにはあなた方の歩みよりも親しみをもって応える。この土は我らの祖先の体だからだ。我らの裸足の足は土のこころを敏感に受け止める。土には部族の命が色濃く含まれているからだ。

黒装束の戦士たち、優しい母たち、ほがらかな娘たち、小さな子どもたちがかつてこの地に、喜びに満ちて住まっていた。彼らの名は失われても、彼らは今もこの地の静寂を愛し、この地に結ばれ、夕闇の濃くなる中に仄暗い魂となって姿を現すだろう。最後の一人となった赤い人が地の表から消え、白い人びとの記憶に残る赤い人の姿が伝説と化した後も、この岸辺には姿の見えない私の部族の死者たちが満ちるだろう。あなた方の子どもたちの子どもたちが、畑の中で、店で、道路で、あるいは森のしじまの中に一人でいるとき、彼らは決して一人ではない。この地の上に、人が一人きりでいられる場所はひとつもない。夜、あなた方の町や村の通りが静寂に包まれ、人影ひとつないと思うとき、そこはかつてこの地に満ち、この美しい土地を今も愛し、戻って来る死者たちの群れで覆われているだろう。白い人が一人になることは決してない。白い人が私につながる人びとを正しく遇さんことを。死者はいつも無力ではないのだから。

原注1 (Dr. Smith による)

当時のインディアンは、ジョージ・ワシントンがまだ生きているものと考えていた。彼らはワシントンが大統領の名だと知っていたので、ワシントンの大統領と聞いて、都市の名前を生きていて統治している酋長の名と勘違いしたのである。また、彼らは英国はまだジョージ王が治めていると信じていた。なぜなら、ハドソン・ベイ(訳注:19世紀にピュージェット湾地域に基地をおき、貿易活動をしていた英国の貿易会社Hudson Bay Company。インディアンと密接な親交があった)の貿易商人たちは自らを「キング・ジョージの民」と呼んでいたからである。この罪のない惑わしにより、ハドソン・ベイの人びとは抜け目なくも、インディアンに事実を説明せずに済んでいた。英国が女王によって統治されていることを知ったら、インディアンから同等の尊敬を得られないかも知れないからである。

訳: 城田朋子 Pondzu@Yuzuwords

参考: Albert Furtwangler, [Answering Chief Seattle](#), 1997 Seattle, University of Washington Press

BORで小グループ対話

- 今日の授業のふりかえり
- 今日の話で印象的だったこと、学んだことは？

次回7/26は、もう最終回！

- W9-716対面＋オンラインも繋ぎたく。（誰かサポートを）
 - 大体の人数を確認しておきたい。
- 前半：聖フランチェスコの平和の祈り
- 後半：「最終レポート」を持ち寄り、シェア大会
 - この授業を通して、学んだこと・考えたこと。
 - 1) 印象に残ったことを3つほど具体的に挙げ、どんな気づきや学びがあったかを教えてください。
 - 2) この授業の学びから、各自の研究や人生、そして持続可能な社会に役立つことがあるとすれば、どんなことですか？
 - A4、2枚程度。（1600～2400字程度）。最終提出は翌日中。
- さらに、レポートを元に、次回、ポイントをプレゼンしやすいように、パウポ（紙芝居）など5枚程度で「プレゼン資料」も用意してください。（こちらは提出は不要）